

## 第八章 協業、または労働の結合

### 一

労働の生産性を高める事情をこれまでいくつか列挙してきたが、重要性が高く、論点もそれに関わる議論の範囲も広いため、別途取り上げるべき事項が一つ残っていた。結論から言えば、それは協業、つまり多くの人が力を合わせて働くことである。この生産を助ける大きな仕組みの中でも、分業と呼ばれる一部の領域は政治経済学の研究者の強い関心を集めてきた。こうした注目が妥当であることは確かだが、その結果として、同じ包括的な法則に属するほかの事例や具体例は十分に検討されないまま、後回しにされがちだった。ミスター・ウェイクフィールドは、私の記憶では、論点の一部が全体であるかのように誤って扱われ、そのために不利益が生じてきたこと、そして分業の原理の背後には、分業をも包含する、より基礎的で根本的な原理があることを最初に指摘した。彼によれば、協力には明確に二つの種類がある。第一は、複数の人が同じ仕事に従事

し、互いに助け合う場合の協力で、単純協力と呼べる。第二は、複数の人がそれぞれ異なる仕事に従事しながら、互いに助け合う場合の協力で、複合協力と呼べる。

単純な協業の利点は、二匹のグレイハウンドが連れ立って走ると、別々に走る四匹よりも多くの野ウサギを捕らえられる、という例で説明できる。人の労働でも同じで、単純作業の多くは二人で組んで働くほうが、四人がそれぞれ単独で働く場合、場合によっては十六人がそれぞれ単独で働く場合よりも多くの仕事をこなせることがある。重量物の持ち上げや運搬、伐採、製材、晴天が短い時期に干し草や穀物を取り入れる収穫作業、適期の短い排水工事、船上での綱引きや大型艇のこぎ、採鉱や建設の一部工程、足場の組み立て、道路補修での碎石作業などでは、多人数が同じ場所で同じやり方で同時に働くことが欠かせない。ニューホランドの人びとは、最も単純な作業でさえ助け合わないため、生活水準は野生動物と比べても大きくは上回らず、点では下回る、ともいわれる。もしイギリスの労働者が単純な仕事で助け合うのを突然やめたなら、単純な協業の利益の大きさはすぐに明らかになるだろう。無数の仕事において、労働の産出は一定の範囲までは労働者どうしの相互扶助の度合いに比例し、これが社会改善の第一段階となる。

第二段階は、ある集団が内部で協力して必要量を超える食料を生産し、別の集団が内部

### 3 第八章 協業、または労働の結合

で協力して必要量を超える衣料を生産し、余剰どうしを交換して資本を得ることで、それぞれの職業により多くの労働者を配置できるようになる局面であり、ここでは単純な協業に、ウェイクフィールド氏のいう「複合的協業」が加わり、前者は同一作業における相互援助、後者は作業の分割による相互援助として位置づけられる。

協力には単純なものと複雑なものがあり、その違いは重要である。単純な協力では、当事者はその場でそれを行っていることを常に自覚でき、最も無知な人の目にも明らかである。たとえば、数人が同じ重さの荷物をいっしょに持ち上げたり、同じ綱を同時に同じ場所で引いたりすれば、見ただけで互いに協力していることが分かる。これに対して複雑な協力では、それを実践する人数がどれほど多くても、協力していると意識できるのはそのうちのごく少数に限られる。人や集団が異なる時期や場所で別々の仕事に従事する場合、協力関係が同じくらい確かなものであっても、単純な協力ほど容易には見取れず、理解するには頭の中で整理して考えるような複雑な思考のはたらきが必要になる。

現代社会では、羊を繁殖させて飼育する人がいれば、羊毛を紡ぎ手が使えるように整える人がいて、それを糸に紡ぐ人、糸を織ってラシヤにする人、布を染める人、それを

上着に仕立てる人というように、仕事は工程ごとに細かく分かれている。工程が進むにつれて運送業者や商人、仲介人、小売業者なども動員され、関係者は数えきれないほどになるが、彼らの多くは互いを知らず、前もって取り決めに交わしているわけでもない。それでも結果として、一着の上着を生み出すための実質的な協力が成り立っている。しかも、その協力は衣料の工程だけに限られない。各工程を担う人が自分の仕事に専念するには、食料などの生活必需品が得られるという見通しと信頼が欠かせないため、食料を生産する人や住居を建てる人も、本人が意識していなくても、その労働を通じて上着の生産と結び付いている。そこには現実の、しかし言葉にしにくい連携があり、「自分たちに必要な量を超える食料を生産する集団は、自分たちに必要な量を超える衣料を生産する集団と交換できる。だが、両者が距離の隔たりや気乗りしないことなどによって分かれている場合、全体のために十分な食料と衣料を確保するという共通の目的のもとで、事実上一つの集団として結び付かないかぎり、十分な量の食料と衣料を生産するという全工程を、二つの別々の部分に分けて進めることはできない」と説明される。

職業や職務を分けて担うことが生産に及ぼす影響は、この問題がふつう論じられる仕方から読者が想像しがちな以上に、はるかに根本的である。異なる品目や種類の財の生産を、それぞれ別の人が専業または主な仕事として引き受ければ、各品目の産出量が大きく増えるだけではない。真実はそれ以上であり、何らかの分業がなければ、そもそもほとんど何も生産されず、種類も量もごくわずかに限られてしまう。

同じ方法で働く複数の家族がいるとする。各家族は自分の土地に住み、自分たちの労働で自分たちの生活に必要な食料を作って暮らしを立てるが、全員が生産者で余剰生産物を買収する相手がいないため、衣類など食料以外に消費する品も家の中で自給しなければならぬ。このような状況で、土地がほどよく肥沃で、人口が生活に必要な食料を過度に圧迫しない場合には、家の中の手工業がある程度生まれるだろう。家族の衣類は家の中で糸を紡いで織られるかもしれないが、その担い手はおそらく女性であり、これが仕事の分化の出発点になる。また、何らかの住まいも建てられ、家族の共同作業で手入れや修理が続けられるだろう。しかし、季節の変動に左右されやすい簡単な食料、粗い衣

類、きわめて不完全な住まいという水準を超えて、家族がそれ以上のものを生み出すのはほとんど不可能である。そこまでまかなうだけでも、一般に最大限の努力が必要になる。土から食料を引き出す力でさえ、農具の質によって狭い範囲に抑えられ、その道具は必然的にひどく粗末なものにならざるをえない。便利品や贅沢品まで自作しようとなれば時間がかかりすぎ、場合によっては別の場所に出向かなければならないことも多い。その結果、産業の種類はごく限られ、しかも存在するとしても必要品の生産に偏り、その効率はきわめて低くなる。これは道具が不完全であることだけが理由ではなく、土地とそれに支えられた家内労働が、ある家族の必要品を相当な余裕をもって供給できるようになったなら、家族の人数が変わらない限り、土地や労働からさらに多くを生み出すとする動機がほとんどなくなるからである。

しかし、この小さな入植地、つまり共同体の状況を一変させる出来事が起きたとしよう。道具をそろえ、約一年分の食料を携えた職人の一団がこの地に到着して住民の中に居を構え、素朴な人々の好みに合う日用品や装飾品、装身具を作る。そして、持参した食料が尽きる前にそれらをかかなりの量まで生産し、追加の食料と交換できるようになったのである。これによって、土地を持ち、その土地に頼って生きる住民の暮らしぶりや

経済的な立場は大きく変わる。これまで自分たちの労働だけでは作れず手に入らなかった品々が、食料や必需品を少し多く生み出せば手に入るようになり、快適さやぜいたくが現実になるからだ。住民は生産性を高めようとし、初めて手に入るようになった便利なものの一つとして、より良い道具を手に入れる機会が広がるだけでなく、いつそう熱心に働き、工夫によって労働をより有効なものにしようとする動機も強まる。その結果、住民は自分たちの食料に加えて新参の職人たちに回せる余剰を土地に生み出させ、その余剰を代価として職人たちの生産物を買うようになる。職人の到来は、農業余剰の受け皿となる市場を形づくり、製造品が供給されたことだけでなく、職人たちが消費者として加わったために、彼らがいなければ生産されなかった食料まで生み出されることで、入植地をより豊かにした。

本説は、先に示した「商品市場があるだけでは労働の雇用は生まれない」という命題と矛盾しない。農業従事者の労働には当初から雇用があり、後から来た人びとの需要のおかげではじめて生計が成り立ったのではない。そうした需要がもたらすのは、労働をいつそう活発にし、効率を高め、新たな動機によって努力を引き出すという効果である。新来者についても、農業従事者の需要が彼らに生活や雇用を与えたとはいいいにくい。一

か年分の食料を備えていれば、先住者の近くに住み、先住者と同程度に乏しい食料や生活必需品の蓄えを自ら生み出すことは可能だったはずである。しかし、異なる産業に従事する別の生産者が近くにいることは、生産者の労働の生産性を左右するきわめて重要な条件であり、ある労働の産物を別の労働の産物と交換できなければ、全体としての労働量はほとんどの場合、より少なくなる。さらに、ある生産物に新たな市場が開かれて生産が増える場合でも、その増産が必ず他の生産物を犠牲にして得られるとは限らない。増産はしばしば、そうでなければ動かされなかった労働が動き出した結果であり、また、より多くの産出を増やす誘因が与えられなければ採用されなかった改良や協業の方法が労働を助けた結果でもあって、新たな生産が生まれることが多い。

## 三

以上の考察から、国が生産的な農業を営めることは、都市人口が大きい場合を除けばまれであり、代わりに成り立つのは、他地域の人口を養えるほど農産物の輸出貿易が大きい場合に限られることが分かる。ここである都市人口とは、簡単のため非農業人口を

指す。これらは労働を組み合わせる必要から、一般に町や大きな村に集まる。ウェイクフィールド氏がこの真理を植民理論に当てはめたことは注目を集めており、今後さらに大きな関心と呼ぶのは確実である。それは、いったん示されればあまりに当然に思えるため、発見の功績が実際より小さく見えてしまう類の、重要な実務上の発見の一つである。彼は、当時一般的だった新たな入植地のつくり方、すなわち複数の家族を並べて住まわせ、各家族が自分の土地を持ち、皆が同じやり方で耕す方式は、条件がよくても生活必需品をどうにか満たす程度にはなっても、大きな生産や急速な成長には決して有利にならないと、最初に指摘した。これを踏まえた彼の制度の要点は、植民地が当初から農業人口に見合う比率の都市人口を備えるよう整えるとともに、耕作者が散らばりすぎて距離のために、その都市人口を生産物の市場として利用する利益を失わないよう、配置を工夫することにある。この構想は、大区画の土地を保有し雇用労働で耕すほうが生産性が高いという学説の当否とは切り離されている。仮に小区画に分けて自作農が耕すほうが最大の収穫を得られるとしても、その自作農により大きな生産を促すには、同じく都市人口が必要になる。最寄りの非農業産業の中心地から遠すぎて、余剰を処分し、ほかの必要を満たす市場として利用できないなら、一般にその余剰も、それに見合う等

価物も生産されにくい。

インドのような国で産業の生産力を抑えている最大の要因は、都市人口の少なさにある。インドの農業は小区画による小規模経営が中心であったが、村の制度や慣習によって必要に応じた共同作業の仕組みが整えられており、それでも不十分な場合には、行政が一定の水準に達していれば、政府が歳入を投じ、共同労働によって貯水池や堤防、灌漑施設など不可欠な工事を進めてきた。ところが、農具や農法の改良は遅れ、土壌の肥沃さや気候条件に恵まれていながら、収穫量は低いままにとどまっている。小区画経営のままでも、土地は現在の人口を大きく上回る人々を養えるだけの食料を豊富に生み出しているのに、それを実現する刺激が乏しいのは、農村と都市を結ぶ便利で安価な交通や連絡手段が整わず、都市が需要を生み出す力も弱いからである。都市人口が増えにくい背景には、耕作者の欲求や向上心の乏しさに加えて、つい最近まで軍事と徴税の強圧によって財産権が不安定となり、都市の生産物を消費しようとする動機が抑えられてきた事情がある。この状況で生産力を早期に伸ばす道としては、綿花、インディゴ、砂糖、コーヒーなどの農産物について、ヨーロッパ市場向けの輸出を速やかに拡大することが現実的である。輸出作物の生産者が国内の農民から食料を購入することで余剰食料の販

路が開け、統治が良好であれば、ヨーロッパ製品や、国内で生産するにはより多くの製造業人口を必要とする商品の需要が、段階的に育っていく。

#### 四

ここまで述べてきたのは職業の分離である。これは労働を結び付ける仕組みの一つで、これがなければ産業文明の初歩すら成り立たない。しかし、この分離が社会に十分に根付き、生産者が一種類の商品を多くの人に供給する一方で、自分が消費する品の大半を他者から受け取ることが社会の慣行になると、同じ原理をさらに広げようとする動きが出てくる。差し迫った必要性は薄れても、なお確かな理由がある。というのも、工程をさらに細かく分け、各労働者がより少数の単純作業に専念するほど生産力が高まることが分かってくるからであり、やがて分業の典型例が現れる。この点を示すものとして、アダム・スミスは針の製造を例に挙げ、「針作りはおよそ一八の別々の作業に分かれ、針金を引く人、まっすぐに伸ばす人、切る人、先をとがらせる人、頭を付けるために上部を削る人がある。頭を作るには二、三の別々の作業があり、取り付けるのも別の仕事

で、針を白くするのもまた別である。紙に差し込むだけでも一つの仕事になる。私は一〇人ほどの小さな工場で、一日合計一二ポンドほどの針が作られるのを見た。中くらいの針は一ポンドに四、〇〇〇本以上あるから、一日で四八、〇〇〇本以上となり、一人当たりでは四、八〇〇本になる。だが、これを各人が別々に、しかもこの仕事に習熟しないまま行えば、一日に二〇本作れるかどうかで、一本も作れないことさえある」と述べ、分業が生産力を押し上げることを示している。

セイは分業が生む効果を説明するため、産業としてはさほど重要ではないものの、トランプの製造を例に挙げている。関係者の話では、手のひらほどの厚紙一枚にすぎないカードでも、販売できる状態になるまでに七〇以上の工程を経ており、工程ごとに別の職工が専業で担当できるといふ。しかし実際には、どの工場にも七〇種類すべての職工がそろっているわけではなく、分業が可能な水準まで徹底されていないため、同じ職工が二、三、四種類の工程を兼ねている。こうした作業配分の違いは生産量に直結し、私が見学した工場では三〇人で一日当たり一五、五〇〇枚を生産し、一人当たり五〇〇枚を超えていたが、仮に各人がすべての工程を一人で行わなければならないとすれば、熟練者でも一日二枚が限界となり、三〇人でも六〇枚にとどまるだろう。

時計製造における分業について、バベツジは、庶民院の委員会での証言として、この技術には一〇二の明確に分かれた工程があり、どの工程にも少年を徒弟として入れることができる」と述べている。しかし、徒弟が学ぶのは親方の担当工程に限られるため、徒弟期間、いわゆる年季が明けても、その後追加の訓練を受けなければ、ほかの工程では働けないという。ばらばらの部品を組み立てて時計として仕上げる仕上げ職だけが、一〇二人のうちで唯一、自分の担当以外の工程でも作業できるとしている。

## 五

分業によって労働の効率が高まる理由は、周知のものも少なくないが、全体像を確かめるために、改めてそれらを一通り列挙しておく価値がある。アダム・スミスはその理由を三点に整理し、第一に、各作業者がそれぞれの仕事に慣れて手さばきが増すこと、第二に、ある種類の仕事から別の種類の仕事へ移る際にふつう失われる時間が節約されること、第三に、労働を容易にし手間を省く多くの機械が発明され、一人で多数の人の仕事をこなせるようになることだと述べた。

分業の効果のうち、最も明白で普遍的なのは、作業者それぞれの熟達が進むことである。ただし、回数を重ねれば必ず上達するわけではなく、上達の度合いは作業者の理解力や、手の動きにどれだけ考えが伴っているかに左右される。それでも、反復によって作業がより容易になるのは確かで、身体の器官そのものの力が増し、筋肉は頻繁な運動で強まり、腱はしなやかになり、精神の働きも効率化して疲れにくくなる。作業が容易になれば、うまくできる可能性が高まるだけでなく、手早くこなせるようになる。最初は遅かった作業は次第に速くなり、最初は正確でも遅かった作業も、やがて同じ正確さのまま速くできるようになる。これは身体の動作に限らず頭の働きにも当てはまり、子どもでも練習を重ねれば、数字の列を足し上げることが直観に近い速さで処理できるようになる。どんな言語でも話すこと、すらすら読むこと、楽譜を見てその場で演奏することも、身近で分かりやすい例である。身体の動作では、踊りや体操、楽器演奏における身のこなしや鮮やかな演奏が、反復によって速さと容易さが身に付く例であり、より単純な手作業では効果はさらに早く現れる。アダム・スミスは、「ある種の製造業では、いくつかの工程をこなす速さが、見たことのない人には人間の手に可能だと思えない水準に達している」と指摘した。この技能は、分業が細かいほど短い訓練で身に付き

やすい一方、作業者が多様な工程を担って各工程を十分に反復できない場合は、同じ水準には達しにくい。分業の利点は最終的な能率向上にとどまらず、習得の過程で生じる時間の損失や材料の無駄が減る点にもある。バベッジは、「技術を学ぶ人はどの場合でも、一定量の材料を利益にならない形で消費したり、失敗でだめにしたりする。また、新しい工程に取り組むたびに原材料や半製品の一部を無駄にする。しかし、各人がすべての工程を順番に覚えてそのつど無駄を出すなら、各人が一つの工程に注意を集中する場合より、無駄の総量ははるかに大きくなる」と述べた。一般に、一つの工程を学んでいる最中に、ほかの工程も同時に学ばなければならないために注意を散らされないほうが、担当する一つの工程をこなせるようになるのははるかに早い。

アダム・スミスが分業の利点として二つ目に挙げたのは、作業を切り替える際に生じる時間の無駄を減らせる点だが、この効果については、スミス自身やほかの論者が必要以上に重く見てきたのではないかとも思われる。スミスは、作業場所が違い、道具もまったく異なる仕事どうしは素早く切り替えられず、小さな農地も耕す田舎の織工は織機と畑を行き来するだけでもかなりの時間を失うし、同じ作業場で済む場合でも損失はお大きく、切り替え直後はたいい熱心にも精力的にもなりにくく、しばらくは本気で

取り組むというより手を抜きがちになる、と述べる。さらに、三〇分ごとに仕事と道具を替え、ほとんど毎日二〇通りのやり方で手を動かさねばならない労働者は、だからする癖と不注意で雑な取り組みが身につき、差し迫った場面でも力強く打ち込めなくなるという。しかし、十分な動機がある場合まで含めて農村の労働を一律に非効率で活力に欠けるものとみなすのは、さすがに誇張である。仕事と道具の切り替えが多い庭師が、ふつう力強い働きができないとは言にくいし、多様な道具を用いて多くの工程をこなす上級の職人も、各工程の速さでは工場で単一工程を担う人に及ばないとしても、単なる手先の器用さにとどまらない意味でより熟練しており、あらゆる意味でより精力的だと言える。

バベツジはアダム・スミスの議論を踏まえ、手や頭をしばらく一つの仕事に使い続けたあとで別の仕事に移っても、人はすぐには十分な成果を出せないと述べた。動かしていた筋肉は柔軟になる一方で、休んでいた筋肉はこわばりやすいため、切り替えた直後は動きが遅くなり、動きが不均一になりやすいという。また、同じ作業に慣れることで疲労に耐える力は高まるが、その力は作業条件が変わると発揮しにくいとも指摘した。精神面でも同じで、新しい対象に移った直後は注意が行き届かず、訓練を重ねてはじめ

て精度が上がると説明した。さらに、工程ごとに道具を替えること自体も、作業を切り替える際の時間の損失につながり、道具が単純で変更が少なければ影響は小さいものの、多くの技術工程では道具が精密で、そのつど正確な調整が必要になり、調整時間が使用時間のかんりの割合を占める場合があるとした。スライディングレストや分割機、ドリル機を例に挙げ、一定規模の工場では一台の機械を一種類の仕事に継続して充てるほうが経済的で合理的だとして、円筒加工用、面加工用、歯車切り用に旋盤を分けて専従させる運用例を示した。

私は、こうした異なる事情が重要ではないと言いたいのではないが、見落とされがちな反対の事情もあると思う。肉体労働でも精神労働でも、仕事内容が変われば、その違いそのものがある程度は他方の休みになる。たとえ第二の仕事で最初から最大の力を出せないとしても、第一の仕事も力を緩める時間なしにいつまでも続けられるわけではない。実際、仕事を替えることで、本来なら完全な休養が必要になりそうな場面でも持ちこたえられることは多く、同じ仕事に縛られるより、いくつかの仕事を順にこなすほうが疲れを抑えて長く働ける、というのはよくある経験である。仕事が変われば使う筋肉も精神の働きも変わり、働く部分がある一方で、休んで回復する部分も生まれる。肉体

労働は精神労働の休みになり、その逆も同じである。さらに、変化そのものには人の活力を高める効果があり、機械的ではない仕事の能率にとってとくに重要で、機械的な仕事でも無視できない。ただし、こうした点の重みは人によって違う。一つの仕事を粘り強く続けるのに向く人もいれば、切り替えに向く人もいる。前者は、たとえば「蒸気が上がる」までに時間がかかり、取りかかりの面倒さが長引いて能力が十分に働くまで時間を要するため、いったん調子が出ると止めたがらず、休みなく長時間続けて健康を損ねることさえある。こうした違いには気質も関係し、生まれつき動き出しが遅く、長く従事して初めて仕事が進むように見える人がいる一方で、動き出しは速いが、消耗なしには長く続けられない人もいる。ただ、この点でも多くのことと同じく、生まれつきの差より大きいのは習慣だと考える。仕事を素早く切り替える習慣は幼いころからの訓練で身につけ、いったん身につけば、アダム・スミスが述べたような切り替えのたびのむだは減り、気力や関心の欠如も起きにくくなる。むしろ働く人は、それぞれの作業に新鮮さと活気をもって向かい、よほどの興奮でもない限り、慣れた時間を超えて同じ作業に固執した場合には保ちにくい状態を保てる。女性はふつう、少なくとも現在の社会状況のもとでは、男性よりはるかに多才であり、この点は、女性の考えや経験が人々の意

見形成でどれほど軽んじられてきたかを示す一例でもある。仕事は長く続けるほど力強くなり、別のことに替えた直後はしばらく能率が落ちる、という見方を、女性の多くは受け入れないだろう。ここでも差の原因は自然よりも習慣にある。男性は一〇人中九人が専門的な職に就く一方、女性は一〇人中九人がより一般的な役割を担い、多数の細かな用事を短時間で次々に処理している。このため女性は、手作業でも知的作業でも切り替えが日常化しており、切り替えに伴う努力や時間の損失が小さい。反対に男性の仕事は、一つのこと、またはごく限られた種類のことに長時間腰を据えて取り組む形になりやすい。ただ、状況が逆になれば性格も逆になりうる。女性が工場労働のような単調な仕事で男性より劣るのだとしたら、これほど広く雇われるはずがなく、また多くのことに手を出す習慣を身につけた男性は、描かれがちな怠け者どころか、たいてい快活で活動的である。とはいえ、いくら多才な人でも、職の変更があまりに頻繁なのは望ましくなく、絶え間ない多様性は、単調さが続く場合以上に、かえって疲労を招く。

アダム・スミスが分業の第三の利点として挙げた点は、全面的に正しいとはいえないが、ある程度は現実であり、事実とも合う。特定の工程や作業を省力化して負担を減らす発明は、その作業に考えを強く集中させ、継続して携わっている人ほど思いつきやす

い一方、注意がほかの用事や分野に大きく向けられている人は、ある一つの分野で役に立つ実務的な改良を生み出しにくい。ただし、この違いを決めるのは、専門性や職務の一つに絞ること自体というより、一般的な知的水準や、ふだんから考える習慣と思考を働かせ続ける力の有無である。職務の固定化や専門化が進みすぎて知的な成長に不利になるほどになれば、この利点による得よりも損のほうが大きくなる。さらに、発明がどのような事情で生まれたとしても、いったん発明がなされれば、労働能率の向上は分業ではなく、発明そのものの効果による。

現代の製造業で進むきめ細かな分業には、職工の熟練や手際のよさの向上に次ぐ大きな利点がある。それはアダム・スミスが触れなかった点としてバベッジが強調したもので、能力に応じて労働者を分類し、労働力をより経済的に配分できることである。同じ一連の工程でも、部分ごとに求められる技能や体力は異なるため、最も難しい作業に必要な技能を持つ人や、最もきつい作業に耐えられる体力を持つ人は、その部分に専従させるほど有用になる一方、だれでもできる作業は、ほかに向く仕事がない人に任せるのが合理的だといえる。生産は、各工程に必要な技能と体力を必要な分だけ投入し、それ以上は投入しないとき、最も効率的になる。バベッジはピン製造を例に、工程で求めら

れる技能の差が大きいため賃金が日当四ペンス半から六シリングまで開き、最高賃金の職工に全工程を担わせると、六シリングと四ペンス半の差に相当する無駄が一日当たり生じると説明している。出来高が落ちる可能性はここではないったん置くとしても、仮にその職工が一〇人で一〇ポンド分を作るのと同じ時間で一ポンド分を作れるとすれば、試算では分業がある現状に比べて製造原価が三倍と四分の三倍に膨らむという。さらに針の製造では差がいつそう大きく、工程別の報酬水準は日当六ペンスから二〇シリングまで広がるとも付け加えている。

技能や熟練を分担して効率を高めるという利点に加えて、道具についても共有して無駄なく使い、その効用を最大限に引き出せるという同様の利点がある。多様な職業に必要な道具を一人でそろえると、そのうち少なくとも四分の三は使われないまま眠り、結果として無駄になることが多い。したがって、たとえ全員が道具一式を保有し、順番に各職を担う社会があるとしても、可能なかぎり道具を分け合い、それぞれが特定の仕事に専念するほうが望ましい。各種の器具が常に使われていれば、購入に投じた費用に見合う成果が得られて支出の見返りが増え、その結果、持ち主はより質が高く、作りの整った道具を備えられるようになる。こうした効果が重なれば、社会全体として将来の需

要に備える供給力もいつそう高まる。

## 六

分業は市場の広さに左右され、市場規模が小さいと十分に進まないという点で、これまでの主要な論者の見方は一致している。たとえば、ピンの製造を一〇の工程に分ければ一日で四八、〇〇〇本を生産できるとしても、毎日およそその数量を買う人に届く市場があつてはじめて、その分業は成立し、工程を細かく分ける利点も生まれる。需要が二四、〇〇〇本程度にとどまるなら、分業も毎日その数を生産できる範囲に抑えるほうが合理的であり、ここには需要の拡大が生産に投入する労働の効率を高める仕組みが表れている。市場が広がらない要因には、人口が少ないこと、住民が散在して距離があり近づくにくいこと、道路や水運が不足していること、住民が貧しく、つまり社会全体の労働が十分に生産的でないため大量に買えないことなどがある。さらに、買い手になり得る人々に怠慢や技能不足、協働の欠如があれば、そのために生産者側でも実際に可能な労働の結合の規模が小さくなり、分業の広がりには制約される。文明の初期には各地の

需要が必然的に小さく、産業が栄えたのは海岸や航行可能な河川を掌握し、世界全体、少なくとも沿岸部や河川沿いの地域を市場として自らの産物売り込めた人々に限られていたが、世界の富が増え、商業交流の自由が進み、航海技術が向上し、道路や運河、鉄道によって内陸交通が整うと、各地域は特産品をはるかに大きな市場へ供給できるようになり、その生産における分業の大幅な拡大が通常の帰結として生じ、各国の労働生産性を押し上げるようになった。

分業は、需要の大きさや産業の規模だけでなく、仕事や雇用の性質によっても制約を受けるため、多くの場合、上限がある。農業は作業の性質上、複数の工程を同時に進めることができないため、製造業の多くの部門のように職務を細かく分けるのは難しく、耕す人、種をまく人、刈り取る人をそれぞれ常に固定する形は成り立ちにくい。仮に工程だけを担当する労働者を置くと、一年のうち一か月は仕事がなくなるため、同じ人が工程を順番に担うほうが合理的であり、多くの気候条件ではそれでも相当の余暇が残る。大規模な農業の改良を行うには、多数の人が一緒に作業する必要がある場合が多いものの、監督に当たる少数を除けば、皆が同じやり方で作業するのが一般的である。運河の造成や鉄道の盛土工事でも、多数の共同作業が欠かせない一方で、技師や少数の

事務担当を除けば、作業者はみな掘削作業に当たる。